

岩波講座

哲学 07

芸術／創造性の哲学

岩波書店

編集委員

飯田隆

伊藤邦武

井上達夫

川本隆史

熊野純彦

篠原賢明

清水哲郎

末本文美子

中岡成文

中畑正志

野家啓二

村田純一

はしがき

哲学が「万学の女王」の玉座を去り、ニトチェが「神の死」を宣告してから久しく、その空位は現在では科学によって埋められようとしている。また、哲学を領導してきた「理性」の特権的地位も、それが身体やシェンダーをもち、暴力や狂気と背中合わせであることが暴露されるに及んで、今や満身創痕といっても過言ではないだろう。9・11テロによって幕を開けた二一世紀も数年を閲し、一方で哲学の必要性が叫ばれながらも、他方で哲学本来の思想的指南力は衰微を覆いがたい。哲学のへ知としての輪郭はダリの描く時計のように溶解してますます見えにくくなっているのが現状である。

顧みれば、二〇世紀の哲学は、さまざまな学派や思想潮流が消長を繰り返していたとはいえ、対立の構図にはそれなりに明確なものがあつた。二〇世紀前半、少なくとも一九六〇年代までは、実存主義・マルクス主義・論理実証主義という三派鼎立の図式が、イデオロギイ的な対立をも含めて成り立っていた。二〇世紀後半にこのトリアーデが崩壊して以降も、ヨーロッパ大陸に足場を置く現象学・解釈学・フランクフルト学派、構造主義・ポスト構造主義など大陸哲学の潮流と、英米圏を中心とする分析哲学やネオ・プラグマティズムの潮流との間には、方法論上の対立を孕んだ緊張関係が存在していたといえよう。

しかし、二一世紀を迎えた現在、このような地理的区分に根ざした「冷戦構造」は徐々に解体に向かつてお

り、既成の学派や思想潮流の間の対立図式はすでにその効力を失っている。その意味で、二〇世紀哲学に思索の源泉と思考の規矩とを供給してきたハイデガーやウィトゲンシュタインのような大哲学者の不在を含めて、現在の哲学状況をゼーデルマイヤーに倣って「中心の喪失」と呼ぶことができるかもしれない。

他方で、先端医療の進歩や地球環境の危機に促されて顕在化した諸問題は、人類の生存や持続可能な社会に対する広範な関心呼び起こし、生命倫理や環境倫理などの応用倫理学を軸に、哲学に対する期待はこれまでになく高まっている。こうした社会的要請は、哲学に抽象理論から実践の有効性をもつ学問への脱皮を促すものといえるだろう。しかし、ギリシア以来の哲学的思索の歴史的蓄積を無視しては、喫緊の課題に対してもその場しのぎの対症療法的な処方箋をしか与えることはできない。たとえば、新たな応用倫理的諸問題は、「個人」「社会」「公共性」といった、私たちの倫理的実践的思考を支えてきた基本的語彙の意義を原理的次元から問い直すことをも要求しているのである。哲学の今日的あり方にかかわるこのようなジレンマは、哲学とはいかなる営みなのかという問い、すなわち哲学のアイデンティティをめぐる古くて新しい問題を再び提起するに至っている。

それと同時に、哲学のアイデンティティをより根底で揺るがしているのは、二〇世紀後半に飛躍的發展を遂げた生命科学、脳科学、情報科学、認知科学などによってもたらされた科学的知見の深まりである。かつて「心」や「精神」の領域は、哲学のみが接近を許された聖域であった。ところが、現在ではデカルト以来の内省的方法はすでにその耐用期限を過ぎ、最新の脳科学や認知科学の成果を抜きにしては、もはや心や意識の問題を論ずることはできない。また、道徳規範や文化現象の解明にまで、進化論や行動生物学の知見が援用されていることは周知のとおりであろう。そうした趨勢に呼応して、哲学内部においても自然主義的主張が力を増し

ており、哲学と科学との境界が不分明になるとともに、「哲学の終焉」さえ声高に語られるまでになっている。もちろん、フッサールの『ヨーロッパ哲学の危機と超越論的現象学』を引き合いに出すまでもなく、哲学のアイデンティティ・クライシスは今に始まったことではない。しかし、現在の私たちが直面している問題状況は、ディシプリンとしての哲学そのものの存立基盤が脅かされているという意味で未曾有のものであり、流れに棹さずにはせよ抗うにせよ、哲学に携わる者一人ひとりが真摯な応答を迫られていることだけはたしかである。

さらに、政治や経済の領域におけるグローバル化の奔流は、文化や思想の領域にまで及ぼらしている。そうしたなかにあつて、アジア地域やイスラーム圏からの眼差しを哲学の自己認識の鏡として取り込むことは、今日避けては通れない課題ではないだろうか。哲学はその誕生の経緯から、著しくヨーロッパに偏った歴史を形成しており、現在でも哲学史といえば西洋哲学史を意味している。しかし、二〇世紀末に登場したオリエンタリズムへの批判的考察やポストコロニアルな視点からする言説の見直しは、哲学的思考における西欧中心主義の根深さや弊害を白日の下に晒してきた。哲学が自己認識の学であるとすれば、他者の眼差しを欠いたところに自己認識がありえないことも自明であろう。私たちが「哲学の他者」からの視線を不可欠と考えたゆえんである。むしろそれは、安易な「東洋哲学の復権」などとは無縁の事柄であり、ここで問われなければならないのは、むしろ日本という場所で哲学を営む私たち自身のあり方にかかわる。哲学の普遍性とはア・プリオリな所与ではなく、そうした絶えざる自己剔抉の辛苦を通じてようやく担保されるものだからである。

以上のような現状認識を踏まえた上で、私たち編集委員が共有した基本方針は、このような時代だからこそ「哲学の原点」に立ち還るということであつた。つまり、物事を根底から考え直すという普遍的営みを講座編

成の基盤に据えるということである。そのため、学派や流派のバランスには一切顧慮することなく、二二世紀の現在、私たちが根本に遡って考察すべき問題群を指標にして各巻を構成するという方針を貫いた。

このような方針をとった結果、各巻の編成はきわめてオーソドックスな形となった。これは哲学が一方で時代を超えた「不易」の営みであることを反映しているといえよう。しかし他方で、現代を生きる「流行」の面を映し出し、現代人の問題関心に応えるアクチュアリティをもつことができなければ、今日の時点で哲学講座を刊行する意味は失われるであろう。この不易と流行の両面をすくい取るために、各巻のタイトルはスラッシュ(／)をもって表現されている。「知識／情報の哲学」や「心／脳の哲学」などに見られるとおりである。そして、各巻は二部に分ける構成をとり、その第Ⅰ部では問題領域の基本的論点を歴史的背景のもとに提示することを、第Ⅱ部では当該領域の現代的争点を明示して論争状況に大胆に切り込むことを目指している。巻頭の「展望」では、その巻の主題にかかわって、思考の現在に一つのパースペクティブを与え、中核となる「探究」では、より大きなスケールをもって、包括的で彫り込みの深い論考の器となることを期している。巻末の「概念と方法」は、蓄積されてきた思考の工具箱の再点検を、また「テキストからの展望」は、一歩進んだ読書へのガイドを企図したものである。

私たちが掲げた編集目的がどの程度達成されているか、これは読者の判断に俟つほかはない。二二世紀最初の哲学講座として刊行される本シリーズが、混沌する世界の中で真摯に思考の手がかりを求める人々の手に渡り、風の予兆を孕んだ海を航行する「知の羅針盤」としての役割を果たすことができれば幸いである。

編集委員一同

目次

はしがき

展望 芸術の生成をめぐる	……………	篠原資明	1
一 存在賦与の単交通			
二 形賦与の単交通			
三 双交通と逸脱			
四 異交通と二重生成			
五 ありなし間／いまかつて間			
六 形つくる主体／居あわせる主体			
I 創造性の諸様態			
一 存在と無のへあいだ	……………	澤田直	17
— 創造性について —			
一 神々のいる風景			
二 異名というトポス			

- 三 ペルソナの裏面
- 四 詩と哲学
- 五 他なる認識としてのミメーシス
- 六 反歌として

2 想像力と形 北村知之 41

はじめに

- 一 想像と知覚
- 二 イメージと芸術作品
- 三 形象形成力としての想像力
- 四 創造的想像力

3 美学的カテゴリー論再考 岡田温司 65

- 一 美学的カテゴリーの逆説と現代的意義
- 二 モダン／ポストモダンを横断するカテゴリー、「醜」と「崇高」
- 三 バロック的カテゴリーの星座

4 受け手の役割 北村清彦 89

- 一 美的コミュニケーション
- 二 受容美学とその読者像

三 芸術解釈学による主体と世界の変容

おわりに

II 創造性の再検討

1 メディアとジャンルの越境と横断 大塚直子 113

はじめに

- 一 メディアの相互依存性
- 二 写真と絵画——クリシェの破壊
- 三 コードとアナログ、もしくは脳と神経系
- 四 諸感覚の存在論的交通
- 五 感覚と身体
- 六 ジャンルを超えて

2 危機の時代とアート 神野真吾 135

——アートワールドの外へ——

はじめに

- 一 アーサー・ダントのアートワールド
- 二 ジョージ・ディッキーの制度論
- 三 再生産される高尚な芸術の理解者たち
- 四 作品鑑賞に必要なコード

- 五 文化エリート
- 六 自己中心主義と芸術
- 七 アートワールドとその外部
- 八 トライバルな存在としての美術館
- 九 重要性の地平
- 一〇 私たちのアートとは

- 3 芸術の方法と方法の芸術 中ザワヒデキ 155
 - 序
 - 一 芸術の方法と自律性
 - 二 芸術の方法と多様性
 - 三 方法の芸術と発明
 - 四 方法の芸術と要請
 - 結

- 4 世界における日本の美学 マイケル・マルラ 179
 - 一 美学と日本文学
 - 二 日本の哲学との対話
 - 三 解釈の挑戦
 - 四 第三の波へ

- 探究 現前と痕跡 山内朋樹 203
 - はじめに
 - 一 触発と類似
 - 二 離脱と転換
 - 三 錯層体としての記憶
 - 四 親密な認識
 - 五 創造の二重狂乱
 - おわりに

- 概念と方法
 - 加藤素明・古賀純子
 - 北村知之・伊藤悠・若林雅哉
 - 神野真吾・蘆田裕史
 243

- テキストからの展望
 - 加藤素明・若林雅哉・北村知之
 - 古賀純子・蘆田裕史・岡本源太
 - 大塚直子・伊藤悠
 263